

AWC通信

住み続けられるまちづくりを

マリ・クリスティーン

この一年、私たちの活動へのたくさんのご協力をありがとうございます。

私たちは今年度も様々な事業を実施して参りました。数々の継続事業に加え、今年は女川町の獅子舞をタイにお連れして文化交流事業を実施しました。

タイの山地民の人々は、今も昔からの伝統的な暮らしを続けていますが、電気やテレビ、携帯電話などの普及の影響もあり伝統文化の継承が難しくなっています。自分たちの文化に誇りを持つ若者が減り、進学や就職で村を離れると戻らない状況も出てきていることは、村の崩壊につながる大きな問題です。

文化人類学上でも重要な彼らの文化が失われつつあることはとても残念で、文化継承の重要性を何とか伝えられないかと考えていたところ、子ども達への伝承に力を入れている宮城県文化財の獅子舞と出会いました。

女川町では、お正月やお祭りの時に獅子舞が家々を回り無病息災や大漁を祈る伝統が180年以上も続いていて、次世代への伝承にも力を入れています。東日本大震災の時には人口10,051人のうち約8,900人が被災し、大きな被害を受けた女川町ですが、5月3日の熊野神社の大祭には氏子の方々が中心となって、犠牲者への鎮魂の祈りを込めた獅子舞を大人と子どもが一緒に行い、地域の復興への大きな力となりました。



バンメーランカムスクールにて

11 住み続けられる まちづくりを



SDGsの目標11は「住み続けられるまちづくりを」です。包摂的で、安全で、強靱で持続可能なまちのために必要なものは住宅や道路、上下水道等の様々なインフラ設備ですが、住み続けるために何よりも大切なのはそこに住んでいる人々の繋がりなのではないかと私は思います。どんなに立派な道路や建物があっても、そこに住む人々が自分達の地域を大切にしていなくては「住み続けられるまち」にはならないからです。人びとのつながりが希薄になりつつある今、伝統文化の継承の大切さを伝える事業ができたことはSDGsへの貢献としても意義あることでした。この事業を助成して下さった国際交流基金アジアセンターを始め多くの方々のご協力に感謝申し上げます。



バンメーランカムスクールの子どもたちは獅子舞に大喜び



合唱してお獅子を拝むパーツキャオ村の女性たち

獅子舞 in タイ

7月25日～8月1日、女川町熊野神社氏子の獅子舞グループ「まむし」がタイの山に行きました。

訪問先はバンメーランカムスクール、バーンロムサイ、希望の家、ドロップインセンター、暁の家とアカ族の村、ラフ族の村の7か所です。

獅子舞の主役は中学生と高校生。大人に交じって中学生が演じるエネルギッシュな獅子舞は、力強い太鼓と心地よい笛の音と共に人々を魅了し、どの訪問先でも大歓迎を受けました。獅子に向かって手を合わせて拝む高齢者もあり、言葉や宗教は違っても幸せを願う気持ちはしっかりと心に届いたようです。言葉は必要のない素晴らしい交流ができました。アカ族やラフ族の踊りも披露していただき、一緒に踊り一体感の中で共感の輪が広がりました。伝統文化の持っている力は普遍的なものであり、人の心に深くしみこんで人を結びつける大きな力を持ったものであることを実感しました。



バンメーランカムスクール



ドロップインセンター



希望の家

おたがいさまプロジェクト

2018年2月から開始した「おたがいさまプロジェクト」は、「困ったときは、おたがいさま」の気持ちで支え合う関係のプロジェクトです。

この事業をタイ側で管理して下さっているのは北部チェンライ県ノンフォーマルエデュケーションのギー先生です。先生の担当している子どもたちの多くはストリートチルドレンや移民の子どもたちで、子どもたち自身では解決することは難しい、複雑で根深い問題を抱えています。ギー先生は、子どもたちに勉強を教えるだけでなく、様々なライフスキルトレーニングや農業研修などを行っています。

「おたがいさまプロジェクト」では現在、ギー先生が子どもの保護のために開設した寮と母子家庭でHIVに感染している母と息子（小4、HIV感染なし）をサポートしています。

寮では4人の男子（15歳、16歳）が共同生活しています。4人中2人が無国籍で、1人は今後もタイ国籍が取れる見込みはありません。彼は幼い頃に母親とミャンマーからタイに移住してきました。母親は現在31歳なのですが、21歳の男性と交際しています。15歳の子にとって、自分とさほど年齢が変わらない男性が母親の恋人として一緒に暮らすことには耐え難いものがあるようです。そもそも母親とは幼い時からほとんど一緒に暮らしたことはなく、あちこちの施設をたらい回しに預けられていました。この母親もミャンマーにいる時に薬物中毒の夫から激しいDVを受けタイに逃げるように移住した経緯があります。当時まだ20代前半で、故郷を捨てて子どもを抱えて国を越えてきたと思うと綺麗事ばかりではない現実を感じます。

ギー先生の私設寮は既存の施設の枠組みには合わない、けれど家庭にもいられないという子どもたちの受け皿のような役割を果たしています。子どもたちが自分の足で自分の道を歩いて行けるように、お手伝いをしていきたいと思います。（AWCユースリーダー 原梓）



腰まで水につかりながら草むしりのアルバイト

青年期を迎えたAIDS孤児

タイでは1990年前後に爆発的にAIDS患者が増え、大きな社会問題になり、当時の首相や厚生大臣がHIV感染者を増やさないように対策に力を入れ、感染者の数を横ばい状態にまで治めました。

現在、その頃に生まれた母子感染の子どもたちが青年期を迎えています。生まれた頃には母子感染の子どもは5歳くらいまでしか生きられないだろうと考えられていましたが、親が亡くなった後もAIDS孤児院などで大切に育てられ、薬の進歩と、誰でもが安価に治療を受けられる30パーツ診療のおかげで、抗ウィルス薬を服用しながら成長しました。自立して一人暮らしを始めたり、恋人ができたりと、それぞれが自分の人生を歩き始めています。

しかし現在、彼らの中に、将来を約束したパートナーにカミングアウトができずに薬を飲み忘れたり、隠しておきたいために薬を止めてしまい、CD4が下がり、体調が悪くなってしまおうというような事が起きています。AIDSを発症して重体になり、どこにも相談できずに出身のAIDS孤児院に戻って来る人もおり、亡くなってしまったケースもあります。最近複数のAIDS孤児院から同じような話を聞くようになりました。

抗ウィルス薬は定期的に、同じ時間に飲み続けることが重要ですが、飲み忘れや、飲まないことが続くと薬に対する耐性ができて、薬を変えなければならないのですが、そうすると30パーツ診療の範囲を超え高額な薬代が負担となって薬を止めてしまうこともあるようです。

子どもの頃から20年以上薬を飲み続けている子どもたちの中に、うつ病を発症する子どもも出ているとこのことで、青年期を迎えたAIDS孤児たちに新しい問題が出てき始めました。

「愛の家」のS君が亡くなりました

S君は8歳の時に母親をAIDSで失い、父親が蒸発したためHIV感染の子どものための施設に預けられました。聴覚障害、腎臓病があり、過去に受けた虐待のため男性を怖がり人と馴染めない状態でした。

10年前に「愛の家」に来てからは手厚い保護を受け明るさを取り戻し、1年後には手話を使いながら積極的に誰とでもコミュニケーションを取る元気な少年に成長しました。昨年18歳になったので親戚の家に帰り、スタッフの定期的なフォローで抗HIV薬の服用は続けていましたが、持病の腎臓病が悪化、腎臓肥大からの腎不全により19歳の短い命を終えてしまいました。とても残念です。心よりご冥福をお祈りします。

シンポジウム「性暴力とSNS - ネット社会を生きる子ども」

8月4日（土）13:00～15:00、AIDS文化フォーラムの分科会としてシンポジウム「性暴力とSNS-ネット社会を生きる子どもを守る-」を開催しました。

講師に一般社団法人Colaboの仁藤夢乃さん、インターネットポリシースペシャリストの宮崎豊久さんを迎え、コーディネーターは代表のマリクリスティーンが務めました。

居場所のない寂しさ、辛さからSNSに依存してしまう子どもを性搾取するおとながいるという事実を知り、それを子どもたちの自己責任と責めるのではなく、私たちに何ができるのか考える機会となりました。家庭環境が悪く自己肯定感が持てない、人に相談をした経験がないから気持ちをうまく表現できない、助けを求めることができないといった子どもの存在を改めて認識するとともに、子どもを商品として扱うおとなや社会に対してもっと敏感になり、反対する意識を持つことの大切さを学びました。



今年のノーベル平和賞はコンゴで医師として、攻撃の手段として行われている性暴力で傷ついた女性の治療を行っているドニ・ムクウェゲさんと、イラクでISの性奴隷として暴力を受け続けたナディア・ムラードさんに贈られました。性暴力の根絶に力を尽くしておられる方々です。性暴力はいかなる状況下でも許されるものではありません。AWCは設立した時から、女性や子どもの性暴力、性搾取の根絶をめざして活動してきました。これからもこの課題と真剣に向き合っていきたいと思えます。

西日本豪雨支援事業

今年は、地震、大雨、豪雨による自然災害が相次いで日本を襲いました。被災された皆様に謹んでお見舞い申し上げます。

AWCでは呉市の男女共同参画グループからのご希望により、8月中旬に呉市の避難所に女性用の下着をお送りしました。猛暑が続く中、断水が続く洗濯なども自由にできない状況



呉市男女共同参画センターの方々

だったため、避難を余儀なくされた方々に大変喜ばれました。

緊急募金に寄付をお寄せ下さった皆様に心からのお礼を申し上げます。

持続可能なまち

11月、タイから、最近チェンマイでは環境問題に配慮して、スーパーマーケットで野菜を売る時にプラスチックの包装ではなく、昔ながらにバナナの葉で包んで売ることを薦めるグループが出てきたと連絡がありました。

チェンマイ市内のリンピンスーパーで実際にバナナの葉が使用されているようです。

近代化が進むバンコクとは違う持続可能なまちを作っていこうとする若者たちの発想から生まれているプロジェクトです。



ご寄付・ご協力御礼

2017年12月16日～2018年12月15日 (敬称略・順不同)

【AIDS孤児里親基金】 支援キルトの会ふーぶ 六波羅昭 谷口雅昭 阿部潔 設楽裕子 小島みゆき 黒須春美 田中雅明 花谷泉 高橋清美 地球の子どもに支援する会 矢ヶ崎佐和子 増井俊樹 マリ・クリスティーン

【おなかいっぱいプロジェクト】 原田留美子 六波羅昭 佐藤志津子 貴田晞照 早川すみえ 菊池ヨネ子 支援キルトの会ふーぶ 青山佳子 郷古リカ 赤間幸子 吉岡啓子 幼き聖マリア修道会 尾形登志雄 日比三枝子 大濱悦子 寺尾和子 阿部潔 高品都 堀江五十鈴 丸山佳子 巽司 村田順子 北爪一夫 高嶋威男 小島みゆき 五十嵐千恵子 半田あや 金子安男 大橋真理子 原輝美 矢ヶ崎佐和子 竹内知珠子 田口美恵子 柳原秀子 小林恵津子 鈴木勇 花谷泉 菊池尚 竹田英一・啓子 鈴木佐知子 今井日出

【かいこプロジェクト】 支援キルトの会ふーぶ 増井俊樹 阿部潔 高品都 五十嵐千恵子 花谷泉 矢ヶ崎佐和子

【トライブラリープロジェクト】 一般財団法人日本おもちゃ図書館財団 阿部潔 花島磨理子 矢ヶ崎佐和子 増井俊樹 原梓

【AWC基金】 佐藤真吾 佐藤利明 増井俊樹 齊藤徹 原雄次郎 伊藤たま江 糖澤佐知子 酒井コリ子 朝廣玲子 中村田鶴子 佐伯昭夫 澤渡好子 阿部潔 秋元千代子 高柳葉子 笹田克子 池山洋二 川辺次郎 赤枝恒雄 ソロプチミスト横浜西 八島恵理 山本隆一・頼永 巽司 佐々木佳代 竹田英一・啓子 山本博子 太田有子コンサート 国際交流ボランティア「みなと」グループ 安藤芳子 坂口育子 マリ クリスティーン

【東日本大震災・西日本豪雨】 黒須春美 矢ヶ崎佐和子 奥井利行 池山洋二 丸山佳子 支援キルトの会ふーぶ 増井俊樹 阿部潔

【おたがいさまプロジェクト】 阿部潔 高品都 伊藤康子 小島みゆき 山本良徳 増井俊樹 原梓

【獅子舞 in タイ】 国際交流基金アジアセンター 新倉史朗 靱山正行 阿部潔 増井俊樹 太田祥歌 清水雅子 山本博子 安藤芳子 落合貴美恵 山本佳世

【書き損じはがき】 糠沢佐知子 近藤明子 荒木いづき 倉品邦子 高橋邦尚 伊東喜代治 黒須知子 高橋邦尚 北村雅美 岡部淑夫 伊藤康子 巽司 村田順子 朝廣玲子 阿部潔 中村田鶴子 馬淵信彦・高品都 佐藤真吾 嶋岡みね子 安藤芳子 支援キルトの会ふーぶ 後藤紀久代 北爪一夫 半田あや 岡田靖子 大槻裕美 藤田美江子 金子セツ子 川野碧 渡辺和美 笠本雅巳 伊藤美知子 金子安男 川辺次郎 ガールスカウト山梨県連盟 宮崎恵子 茨木夢子 太田昌治 池谷朋子 浦田知寿子 田口美恵子 大塚久仁子・南美 岩瀬佳子 横浜市民活動支援センター 国際交流ボランティア「みなと」グループ 多賀名和枝 曾我洋子 渡辺京子 清水雅子 丹羽浩康・俊子 山本雅子 五十嵐千恵子 竹田英一・啓子 落合貴美恵 中川順子 川口幸博 橋本美史 今井日出 山本博子

ご寄付のお願い

アジアの女性と子どもネットワークの事業は皆様のご寄付で実施しています。ご協力をよろしくお願い申し上げます。

郵便振替 00200-0-4109
口座名：AWC

※記入漏れ、間違いなどございましたら事務局までご連絡下さい。

書き損じはがき ご寄付のお願い

「おなかいっぱいプロジェクト」は、書き損じはがき2枚で3食分の給食食材費になります。

ストリートチルドレンの子どもたちがご飯をおなかいっぱい食べられるように、お手元の書き損じはがきや未使用切手をぜひAWC事務局までお送りください。子どもたちの健やかな成長のためにご協力をよろしくお願いします。

AWC事務局：〒231-0015 横浜市中区尾上町3-39 尾上町ビル9F YAAIC内



発行元：アジアの女性と子どもネットワーク 発行責任者：山本博子 編集担当：安藤芳子、原梓

〒231-0015 横浜市中区尾上町3-39

尾上町ビル9F YAAIC内

Tel/FAX 045-650-5430 E-mail : awc@h6.dion.ne.jp